



武蔵丘陵森林公園会場の伝統庭園技塾における中瀬操講師の指導による「土の造景」 1979 筆者撮影

## 私と日本庭園協会



1950年生まれ。岡山県岡山市出身。1968〜1971年、京都市の福田造園在籍。  
1971年、岡山市にて自営。主に個人庭園の作庭。岡山後楽園延養亭周りの土間たたき、竹垣、シダレザクラの棚などの文化財庭園の保全に携わる。常にお客様のご要望をお伺いし、想われておられる以上の仕上がりをお心掛けています。

みやけ ひでとし  
三宅 秀俊

庭園協会との出会いは雑誌『庭』がきっかけです。購読して数冊目

に「伝統庭園技塾」の記事を見て、「これは自分にとって為になる」と直感しました。その頃の岡山での庭づくりはマツ・カシなどの段づくりを使うのが主で、そのことにずっと違和感を持っていました。そこで、従業員2名と国営武蔵丘陵森林公園で開催された第1回伝統庭園技塾に参加しました。1979(昭和54)年のことです。

塾長は岩城巨太郎常務理事、講師は小形研三、中瀬操、秋元道明などのそうそうたる先生方でした。参加者は31名。実習では5名ずつ1班となり、私は女性2名と一緒の班でした。お一人はヨーロッパからの参加で、もう一方は東京の造園屋に勤務の方でした。感心したことに2人とも地下足袋を履いてやる気満々でした。1人ずつ与えられた区割りの中で配られた石を使って延段を仕上げていきました。完成後、秋元講師の講評で入社3年目の我社の従業員が「一番良くできた」と褒められたのです。岡山に戻ってから彼の成長は非常に早く、私の想像を超えたものでした。今では我社になくはない存在となっています。

中瀬講師の実習課題では、費用をかけなくても簡単に表現出来る方法を学びました。土を掘り、その土を使って盛土にして芝生を張っただけでしたが、山の稜線と谷との模様を描く手法は、今でもその様な考え方でやっています。中瀬講師にはとても感謝しています。小形講師から夕食時に「園内の樹木について勉強したいと思う人は明朝6時に玄関前に集まりなさい」との声がかかりました。大半の方が集まり、秋元講師と共に樹木名と特徴などを細かな点まで教えていただき、後々まで大変役にたちました。岩城塾長は、茶室と茶庭の縄張りでのつくばい役石の説明で、実際の手燭と湯桶を持ってこれられ、「それぞれが役石の上に乗るだけの大きさが必要なのです」と話され、貴重な体験をする事ができました。また大切な石は、一石ずつ麻袋で包み傷つけない様にし、お客様にもこれは高価なものだと見てわかるようにすることを学びました。

この様な研修会は、講師の方々の想いと熱量が受講生一人ずつに伝わり、参加者自身のためになります。そして、日本庭園協会ならではのものだと思います。これからも日本庭園協会のさらなる発展と想いを十分に生かせることを願っています。(岡山県支部長)

## はじめに

加藤映

私は40数年前、縁あって「わかもと製薬」創業者の長尾欽弥の別荘鎌倉山扇湖山荘で1年半ほど生活する機会がありました。そのときに目にした美しい庭園と飛騨高山から移築されたという豪壮な建物は今も目に焼きついております。

偶然にも、扇湖山荘に残されていた写真やスライド、書簡等を保管す

## 【加藤映プロフィール】



1955(昭和30)年8月14日、山形県鶴岡市にて出生。4歳時に家族と共に横浜に移り住む。男四人兄弟の三男。昭和56年横浜市立大学医学部卒業後、麻酔科医としての勤務を経て平成15年横浜市瀬谷区に「かとうクリニック」開院(令和3年閉院)。趣味はマラソン、釣り、読書、音楽(コントラバス等)。現在は仕事から離れ、長尾家のごとく父の実家である加藤忠廣から繋がる山形県酒田市新堀の加藤家について調査。ウェブサイトに「長尾資料館」とウェブサイト「身似明星」に公開。長尾家の書簡を読む事がきっかけとなり、今は崩し字解読に嵌まっている。

ることとなり、以来、「わかもと製薬」について、また長尾家とその邸宅、そして所蔵していた美術品などの調査をしてきました。長尾欽弥は本格的な日本庭園を個人でつくった最後の人物と言われ、また7代目小川治兵衛の最後のパトロンとも言われています。

今日は長尾欽弥とその夫人よねの生涯と2人がつくった本宅の世田谷宜雨荘と別荘の鎌倉山扇湖山荘、唐崎隣松園の3つの庭園について保管してきた写真などを用いて紹介します。

(今回は「その1」として、長尾欽弥とよねの生涯と本宅宜雨荘を掲載します)

## 長尾欽弥とよねの生涯

「わかもと製薬」創業者の長尾欽弥とその夫人よね(図1)です。1938(昭和13)年の写真で欽弥は46歳、よねは49歳です。長尾家が最も輝いていた頃の写真です。

2人の資料は大変少ないのですが、その中で一番まとまった資料といえるのが、白崎秀雄著『当世畸人伝』



図1 欽弥とよね

です。冒頭に取り上げられた人物は「長尾よね」です。「欽弥とよね」や「わかもと製薬」については、後の調査研究のほとんどがこの本から出発していると言っても過言ではありません。他に欽弥自身が『経済マガジン』に執筆した「私が今日の地位を築き上げるまで」という記事があります。

今日の話の内容は概ねこの2つの資料をベースにしています。

よねは1889(明治22)年、浅草に私生児として生まれます。戸籍では父親の欄は空白になっていましたが、後に田中光顕(註1)が実子として認知しています。

よねは15歳のときに京都に移り、19歳で東京帝国大学卒の土木技師川田亦治郎と東京へ駆け落ちします。東京での生活の詳細はわかりませんが、大井の鮫洲に長くいたようです。亦治郎は鉄道技師として地方への出張で家を空けることが多く、かなりの稼ぎでした。一方、よねは生来金銭に対して淡泊で計画性がなかったようです。よねは世話好きでいろいろな人を家に連れてきては世話をしている、結局、生活はあまり楽ではなかったということです。

欽弥は1892(明治25)年に京都五条で生まれたと思われます。『当世畸人伝』によると、京都府相楽郡湯船村射場に生まれたとありますが、これは欽弥の父親の出生地です。父親はこの湯船村射場の射場家の次男として生まれ、長尾家の次女だった欽弥の母親と一緒に、養



子として長尾家に入ります。そして長尾家の分家を作るべく、京都五条の橋近くの繁華な通りに米屋を持ちます。しかし、まもなく店が倒産し、父親は病に倒れて亡くなり、結局欽弥が5歳のときに一家離散状態となり欽弥は雑貨商を営む横浜の叔父の養子となりました。

ところが、この叔父の店もしばらくして倒産し、早くから欽弥は一家のために稼がねばならない立場になったようです。その後、アイデアマンだった欽弥は「点滅電気広告塔」なるものを目指します。これで特許を取り、発表と同時に1000円で売れました。その資金をもとに薬屋「博仁房<sup>はくじんぼう</sup>」を設立しました。一時はかなり儲かったようですが、1920（大正9）年の第1次世界大戦後の恐慌で倒産し、200万円の大穴を開けてしまいます。このときの経験が後の成功に繋がったと欽弥は書いています。

その頃に亦治郎とよねの家に出入りしていた1人が欽弥を連れて行き、よねと出会うことになります。やがてよね、亦治郎、欽弥の3人による共同生活が始まります。よねと亦治郎の間に子供が1人おりましたが、その子清實は知り合いのところに預けられていました。

そして、この3人は第1次大戦下のドイツの傷病兵がビールの搾りかすで元気になったという話から、乳幼児死亡の根本原因である栄養不足や胃腸障害を改善させるものとして利用できないかと考え、東京帝国大学の農学博士澤村眞が既に酵母の研究を重ねていることを知り、澤村の指導のもとに製剤化に成功し、栄養剤「若素<sup>わかもと</sup>」が完成します。「若素」は「若さの素」ということで名づけられました。発売元は「栄養と育児の会」としました。

発売当初は欽弥が風呂敷を背負って東京の薬局を回って売り歩いていました。この「若素」が全国的に売れ始めるきっかけとなったのが、『婦人倶楽部』の1929（昭和4）年7月号に掲載された記事です。澤村眞と医学博士豊島豊次郎の論文2編と記者の取材記事が掲載され、特に乳幼児死亡率を低下させるというのが全国の母親の心をつかみ、「若素」は爆発的に売れていきます。「若素」は大当たりとなり、短期間に莫大な財を手に入れます。

その経済力を背景に本宅、別荘を次々に建造していきます。この頃よりよねは骨董収集にも傾注し、後に国宝級の骨董美術品を数多く収集することになります。

よねは1929（昭和4）年に川田と離婚し、1933（昭和8）年に欽弥と結婚します。1933（昭和8）年の戸籍には父親は田中光顕となっていました。

田中光顕は女性関係ではいろいろあった人で子供も多くいるようですが、よねのことについては、その真偽は不明です。戦後に白洲正子が扇湖山荘を訪ねインタビュー<sup>註2</sup>をしています。その中でこのことを尋ねています。よねは「嘘や」と答えたとそうです。欽弥は田中光顕を通じて、上流階級の人たちと交流する一方、田中が晩年力を入れた維新烈士の顕彰事業を経済的に支援しました。要するによねが田中の子であることで、相互にとってメリットがあったものと思われれます。

昭和10年代に入り、長尾家にとつては最盛期を迎えます。本宅、別荘を使って多くの人たちを招待し、毎日のように大宴会を催しました。骨董美術品収集は多岐にわたり、欽弥は茶の湯に傾倒していきます。

1936（昭和11）年に欧米旅行に出かけ、ヒットラーと写真を撮っています。欧米旅行の際のロサンゼルスで、よねはここでは成金と言われなくて済むと大はしゃぎだったそうです。1940（昭和15）年には

「わかもと<sup>註3</sup>」の利益が頂点に達します。

終戦が近づくにつれて雲行きが怪しくなっています。本社は空襲で焼け、美術品は扇湖山荘の地下に移されました。戦後は業績不振のため、「東洋醸造」との合併の話もです。責任を取らされた欽弥は社長を辞任させられ、そして長尾家は急速に衰退していきます。合併の話はまともらず、「わかもと製菓」は日銀から出向した牧田鉦市新社長のもと、単独再建を目指し、今の「わかもと製菓」に繋がっていきます。

本宅宜雨荘と隣松園を手放し、多くの美術品が流出していきます。しばらく都内のホテルを転々とした後、最後は扇湖山荘に落ち着きました。よねが1967（昭和42）年に亡くなると、しばらくして欽弥も静かに扇湖山荘を出て行きました。

一時、浅草の辺りに住んでいたという話を聞きましたが、最後は親族も寄せ付けず一人寂しくこの世を去ったということです。

### 欽弥とよねの人物像

周りの人たちの言葉を拾ってみると、欽弥については物静かで口数が少ない。宴会ではよねのはからいが必要とすべきところに座していたが、

あまり周りと話すこともなかった。

学歴はないが、大学教授らと堂々と語り合っていた、といった言葉が残っています。晩年欽弥は鎌倉のある英会話教室に通っていたそうです。

おそらく70代の半ばぐらいだと思えます。非常に学者肌で勉強家であつたと思われます。

一方、よねについては金に淡泊で計画性がない、世話好きで人が喜ぶのを見るのが大好き、姉御肌できつぷが良、「江戸がかつていた」などの言葉が残っています。また良いものを見分ける鑑識眼は特筆すべきものがあつたこと。人を見る目も同様で、世に出る前の若者の世話を親身にしていました。初代若乃花のパトロンとして有名ですが、作庭をまかされた岩城巨太郎もその1人だったのかも知れません。

長尾家の料理を任されていた星ヶ岡茶寮の元料理長加藤彌三郎は、よねは一流の料理人顔負けの舌を持っていたと証言しています。おそらくは会社のことも含め多くのことを欽弥はよねに任せていたものと思われ

ます。  
1939（昭和14）年、北支那方面に視察旅行に出かけた欽弥は、途中でよねに帰ったらしばらくは茶事に専念したいのでよろしくという内

容の手紙を送っています。

また2人は新興成金という壁と戦っていたとも言えます。成金という悪いイメージが付きまといました。

田中光顕の紹介で上流社会のいわゆる名家の人たちと交流していきま

すが、決して歓迎されたわけではなかったと思われる。1935（昭和10）年に米国のガーデンクラブの人たちが隣松園を訪れていますが、その様子をまとめた記録<sup>〔註4〕</sup>には長尾家の名も隣松園の名もありません。要するに、他の歴史ある名家と同等に扱ってもらえなかったということのようです。

また、扇湖山荘の麓の極楽寺にあるトンネルが狭く救急車が通らないと聞き、地元の人たちのために欽弥は費用を出して道幅を広げようとしていますが、地元の人からあんな成金に金を出してもらいたくないと断られたという話もあります。

多くの個人や事業を支援するばかりでなく、大学への寄付や特殊学校の設立、わかもと青年学校、長尾小児病院等の福祉事業にも湯水のごとく金を使っていたのは成金という言葉の持つイメージを払拭しなかったのではと思います。

言われるよねの宵越しの銭を持たないという江戸っ子気質そのままの人生だったようにも見えます。衰退していく中、多くの人たちが長尾家から去っていききました。なんでも買えるだけの財を手にした2人ですが、最後は金では買えないものの重みを感じたに違いありません。

経営者としては問題があつたと言わざるを得ません。

しかし、衰退していく中で黙って指をくわえて眺めていたわけでもありません。1946（昭和21）年10月に横浜伊勢佐木町の「亀楽せんべい」で有名だった長谷川亀楽の三男

武雄に次代を任せるべく、養子として迎えます。大変優秀な人だったようで、一時理事としてその名を連ねますが、残念ながら若くして亡くなつてしまします。もちろんこの武雄が生きていたとしても、既に焼け石に水だったかもしれません、その死は長尾家の衰退を加速させたものと思われ

ます。  
それでは、本宅宜雨荘の庭園に話を進めます。

### 本宅世田谷宜雨荘の構成と配置

本宅は元々「好田荘<sup>こうだそう</sup>」とも呼ばれていたようですが、ここではいつごろから欽弥自身が使っていた「宜

雨荘」とします。

1930（昭和5）年に建造を始め、当初は敷地500坪程度であつたものが、漸次拡大して完成時は7800坪の大邸宅となりました。庭園の完成には10有余年を費やしました。

建築設計は大江新太郎、作庭は7代目小川治兵衛とその甥 岩城巨太郎です。長尾家衰退後、1961（昭和36）年ごろに解体され、都立深沢高等学校が建設されました。現在は校内に大江が設計した「清明亭<sup>〔註5〕</sup>」が残っています。

宜雨荘は1913（大正2）年に開発された東京における初の郊外型住宅分譲地の「新町住宅」の一画にありました。現在の東京都世田谷区桜新町、深沢の一部にあたる地域です。閑静な屋敷街で「都心の軽井沢」と言われ、1000本余の桜を植えたことから、桜新町の名前が生まれました。

現在、敷地の大半は深沢高校になつています。宜雨荘は北西にもう少し広がったよう

です。  
等高線図（図2）を見ると西側が少し高くなっています。東側の低地は高校のグラウンドで非常に平らになっていますが、昔は起伏のある地形だったようです。今は校舎が建つて



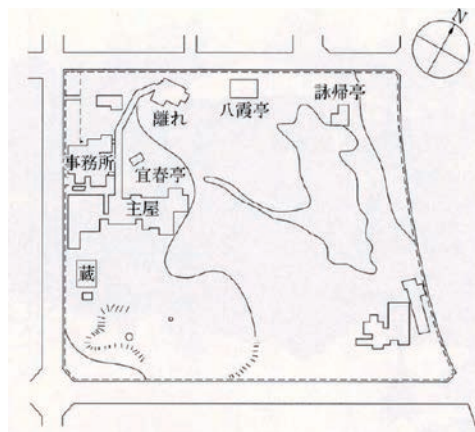


図3 宜雨荘想像図 鈴木博之『庭師 小川治兵衛とその時代』



図2 都立深沢高等学校・敷地の等高線図(0.5m) WEB等高線メーカーより

いる西側の台地部分に当時の宜雨荘の主屋がありました。そして今はグラウンドになっている低地部分に庭が広がっていました。

宜雨荘の全体像については鈴木博之著『庭師 小川治兵衛とその時代』(註6)に記載があり、全体の想像図(図3)も掲載されています。この図は鈴木博之氏が当時出入りしていた人

たちに話を聞いて作成したそうです。その内容について次のように書かれています。

- 大きな池のある広大な庭園
- 様々な意匠の小橋
- 池に流す水は水栓の開閉で調整
- 外部に借景を求められない
- 開放的ではあるが、自足的な世界
- 池に接してあずまや「詠歸亭」

図4は『清明亭写真集』(註7)に掲載されている「旧長尾邸配置図」で

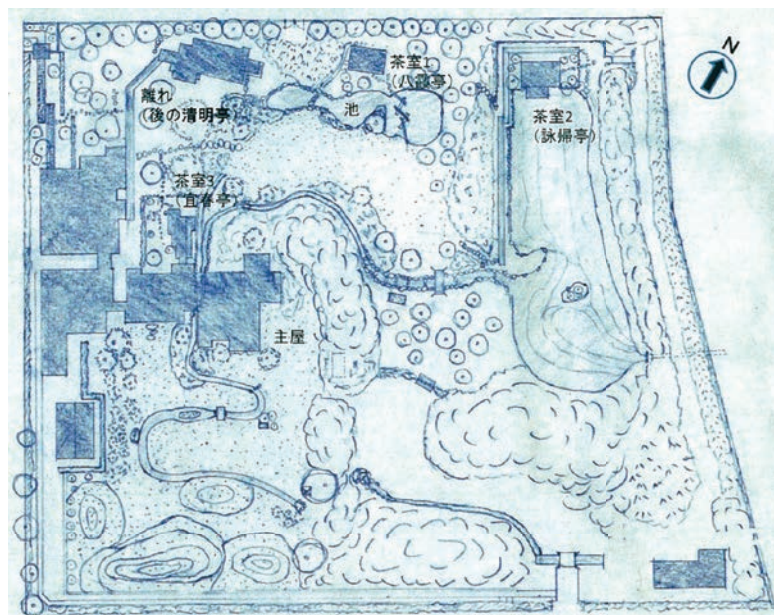


図4 旧長尾邸配置図 『清明亭写真集』

す。建物は前者とはほぼ同じ配置ですが、若干大池の形状が異なります。後者の方が庭の様子が詳しく描かれているようです。

宜雨荘の庭園の特徴は扇湖山荘や隣松園とは異なり、周囲に借景を求めることができなため、庭園内部で完結する自足的な世界が創られました。したがって、茶室等の建物の他に池、山、森、谷、芝原、川の流

れ、そして橋と多くの要素が、複雑につくられています。

工芸家で茶人の仰木政斎は、宜雨荘で行われた美術品(註8)の公開日(昭和26年5月24日)に訪ねています。その折に庭園を散策した様子が『雲中庵茶会記』(註9)に書かれています。当日の散策ルートにそって庭園内のポイントをあげてみましょう。

- 世田谷桜新町の葉桜トンネルを過ぎ、館の門をくぐる
- 玄関を正面に見て庭に入ると、正面に高麗朝の宝塔がある
- 質素な入口とは違

い、斜面に見下ろす大園内は見下ろすからに宏大にて、凡そ1万坪に達す自然樹の庭園である

- 池あり丘あり、数棟の建物は本館の他、茶亭あり
- まず丘を降り、池畔に設けられし休憩所にいこう
- 茶席付きの土間付四畳半、床には古径筆香魚の小点が掛けられ(後略)
- 池中にて今を盛りと花菖蒲が咲き誇り、八ッ橋風の板橋が架けられ、池を透し、十三塔(註10)が聳えている
- 八ッ橋を渡り、森を過ぎまたも降りると、ここはまた過ぎし池に倍する大池があり、元松浦家下谷の名園(註11)にありしという池中に架け出され観月閣とも見える優雅な建物など通りつくせる築園である
- 元の道を岡に戻り、左右橋を渡り、森間を逍遙しながら本館前広い芝生に出る
- この広い芝生中にも遠く洛北辺りに見る柔らかい岡を見ながら、白砂の空流がある

それでは、これらのポイントを押さえつつ、長尾資料館で所蔵する写真を見ながら仰木の散策ルートを検証していきましょう。



# 写真で見る宜雨莊庭園

1930(昭和5)年、桜新町に邸を作り始めた。この一帯は、もと広い田圃の中に将官級の軍人の邸が点在していた。初めは敷地500坪ほどの将官の邸を買い、次々に買いひろげて7800坪に達した。

よねは、京都の数寄屋建築師大江新太郎に建築の設計を依頼、彼がつれてきた岩城巨太郎に庭造りをやらせた。岩城がその後10年余もかかって造った長尾邸庭園は、

1953(昭和28)年刊、戸野琢磨監修『日本の庭園』(岩波書店刊)にも4カットの写真がかかげられているほど有名である。池に渡した八つ橋や、手水鉢、園内の七重塔、多宝塔などの逸品を見るだけでも庭の豪華さは偲ばれる。

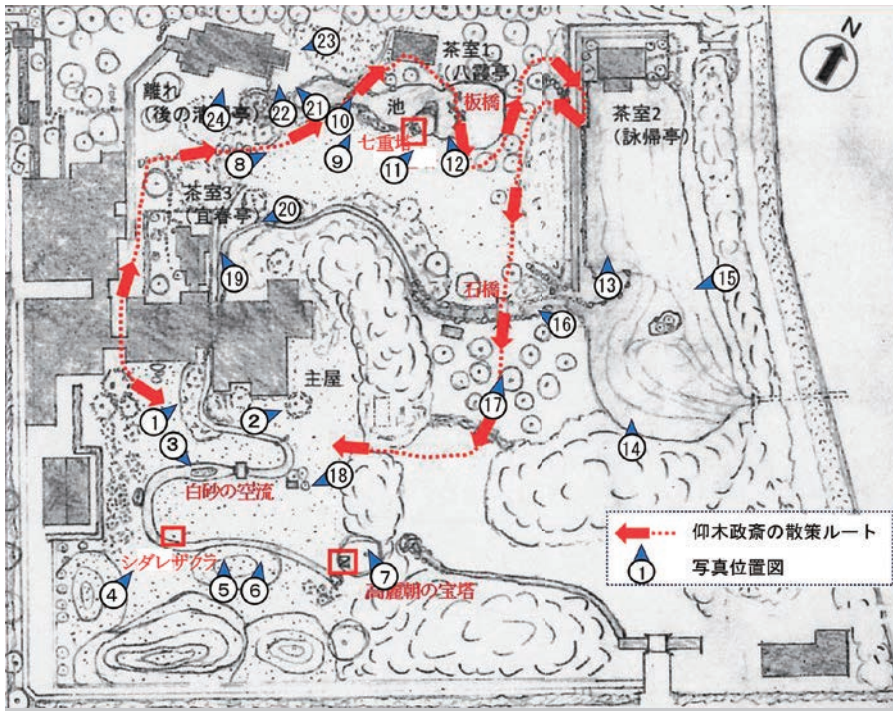
(『当世畸人伝』に追記)

特記以外

- ※1 1950年3月撮影(モノクロスライド)
  - ※2 1953年11月末撮影
  - ※3 1961年4月1日撮影(カラースライド)
  - ※4 撮影年不明(プリント)
- 以上、撮影者は不明だがおそらく長尾欽弥かと思われる  
撮影年月日はスライドが保管されていた箱ごと書かれていた

⑩以外は長尾資料館蔵

## 仰木政斎の散策ルートと撮影ポイント



仰木政斎の散策ルートと写真位置図 『清明亭写真集』の旧長尾邸配置図に筆者加筆

### 西側から見る庭園

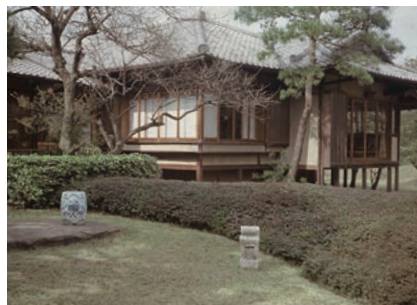


③南方向を広がる庭園。仰木政斎がまず目にした光景です。芝生の中に白砂による川の流れがつくられています。正面に高麗朝の宝塔が見え、その奥が小高い丘になっています。(※3)



④南西側の丘から望むと白砂による川の流れ、棚支柱を施したシダレザクラ、その先に主屋の南東角角が見えています。そして芝生の奥に茶室八霞亭があります。(※3)

### 主屋と庭園



①主屋の南面です。右奥の建物が高床になっていて、撮影者が立っている位置が一段高いのが分かります。(※3)



②主屋の東南の角の辺りです。東側に下がる地形であることが分かります。(※1)



## 八霞亭(茶室1)



⑧芝生の左奥に八霞亭の端が見えています。その前の窪みは池です。(※3)



⑨八霞亭前の池です。池辺のマツの上から石塔の相輪が見えています。(※3)



⑩八霞亭は『日本の庭園』に野趣豊かで田舎風の茶室として紹介されています。(岩波写真文庫146『日本の庭園』、1955)



⑫八霞亭。池には八つ橋が見えます。(※1)

## 庭から主屋方向を見る



⑤南東側の丘から望む庭園と主屋。広い芝生の中に白砂の川の流れています。主屋の南面が良く見えます。(※3)



⑪八霞亭前の石塔。奥に八ツ橋が見えているようです。(※3)



⑥普段は白砂の流れですが、必要に応じて水を流したということです。この写真では水が流れているようです。正面中央に石橋が見えます。(※1)



⑦宝塔の後ろから主屋の東面方向を見えています。(※3)



## 離れ(清明亭)



②①八霞亭から離れ(清明亭)を見ています。崖上に建っているのが分かります。(※2)



②②下から離れを見上げています。よね(右)が写っています。現在もほとんどこのままで保存されています。(※4)



②③崖地に建てられた懸崖づくりです。深沢高校の所有となって「清明亭」と名付けられました。「清く、明るく、たくましく」の校訓から命名されています。(近年、土居隆氏撮影)



②④長尾欽弥、よね夫妻のプライベートな建物でした。手前側に小さな流れが見えます。(※3)

## 林間を抜けて主庭へ



②⑦石橋(右奥)を渡ってしばらく林間を歩くと、最初の見た主屋南側に広がる庭園に出ます。(※1)



②⑧林間を過ぎると広がる芝生の起伏。仰木政斎が「遠く洛北に見るやわらかい丘」と表現した景色です。(※3)

## 宜春亭(茶室3)



②⑨構造を見てみると、主屋北側に隣接する宜春亭であることがわかります。(※1)



②⑩中央から左側が宜春亭です。右側は主屋の屋根です。(※3)

## 詠帰亭(茶室2)



②⑬八霞亭より階段を下りると見える詠帰亭です。手前の芝生は池中に張り出す岬状になっています。(※3)



②⑭大池の南端からみた詠帰亭です。離れると池に張り出す構造と大池の様子がわかります。(※3)

## 石橋



②⑮大池から主屋の建つ台地方向に石橋が見えます。(※1)



②⑯林間の溪流にかかる石橋です。(※3)



## おわりに

宜春亭について少しお話しします。

長尾欽弥自筆の『宜春亭記』<sup>(註12)</sup>が残っています。その中に1943(昭和18)年3月に増改築し客間が完成したとあります。

ただ戦時下であり、そのままにしていきましたが、後に東久邇宮稔彦王<sup>(註13)</sup>が宜雨荘に訪れた際に席開きをしたということです。このとき近衛文麿<sup>(註14)</sup>も一緒に招待されました。

近衛は長尾家の支援を受け、宜雨荘には頻繁に出入りしており、宜春亭と命名<sup>(註15)</sup>したのは近衛です。

敗戦が近づく中、欽弥とよねは国民の心を一つにするには、皇族が総理大臣を務めた方がよいのではと話します。そこで、東久邇宮と近衛の会談の場をセッティングし、そこでは戦後の日本について話し合ったということです。この宜春亭の席開きのときも、その目的があったとも考えられます。

終戦後、東久邇宮が総理になり、近衛が副総理ともいべき国務大臣に任命されます。しかしながら、近衛は戦争責任を問われ、逮捕命令が発出した後、服毒自殺に至るまでの数日を宜雨荘で過ごしました。この

時の様子は、内務官僚村田五郎の談話記録『海鳴り』や白崎秀雄原作の舞台『夢の宴』<sup>(註16)</sup>から想いめぐらせることができます。

この当時、長尾家には小説家や画家など多くの人が出入りしており、様々な人間ドラマが繰り広げられていました。宜春亭などを含め宜雨荘は、その舞台となっていたのです。

(長尾資料館館長)

(文中、敬称略とさせていただきます)

註1…田中光頭は土佐藩の下級武士出身の勤王の志士。明治維新後は長く宮内大臣を務めた実力者。

註2…白洲正子『小説新潮』13(3)、「女傑」新潮社、1959年2月

註3…1931(昭和6)年に「若素」は「わかもと」に名前をかえた。

註4…「米国庭園倶楽部代表訪問記念写真帳」、米国庭園倶楽部招待委員会、1935

註5…深沢高校の所有になってからの名称。長尾家時代は欽弥とよねの居宅。

註6…鈴木博之『庭師小川治兵衛とその時代』、東大出版会、2013

註7…『清明亭写真集』、せたがや街並み保存再生の会、2017

註8…長尾家の美術品は扇湖山荘の長尾美術館に収められていたが、宜雨荘でも公開された年があった。

註9…仰木政斎著、味岡敏夫編『雲中庵茶会記』、限定版、1997

註10…実際は七重石塔。

註11…肥前国平戸藩主松浦家の上屋敷の庭園「蓬萊園」。小石川後楽園、六義園とともに、都下三大名園と言われていたが、1937(昭和12)年に埋め立てられ都立忍岡高等学校になった。

註12…岡宏憲蔵。岡は長尾欽弥の茶の湯の研究者。  
註13…東久邇宮稔彦王は戦後初の第43代内閣総理大臣に任命された。在職54日。  
註14…近衛文麿は東久邇宮内閣の副総理。  
註15…近衛揮毫の扁額は、現在六義園に移築された宜春亭に見ることができる。  
註16…1988(昭和63)年、帝国劇場で上演。主演の森光子がよねを演じた。原作は白崎秀雄『当世畸人伝』。

【参考文献】  
・白崎秀雄著『当世畸人伝』、新潮社、1987  
・長尾欽弥「私が今日の地位を築き上げるまで」『経済マガジン』・九月号、ダイヤモンド社、1937年9月  
・村田光義『海鳴り』、芦書房、2011

## こぼれ話……………『夢の宴』 宜雨荘と近衛文麿

1988(昭和63)年11月、白崎秀雄著『当世畸人伝』の一篇「長尾よね」を原作とした『夢の宴』という芝居が帝国劇場で上演されました。

宜雨荘を舞台に、よねが近衛文麿の愛人で近衛に青酸カリを渡したという設定でつくられた芝居です。森光子がよねを、そして芦田伸介が近衛を演じました。

白崎は自分の家族を連れてこの劇を見に行きました。その時の様子をお子さんの白崎ユミ氏が書いている文章を紹介します。

長尾よね役の森光子の名演技が大向こうを唸らせ、千秋楽には大入り袋が振る舞われた。

脚本と俳優がいいからと話していた白崎は終始機嫌が良かった。

一日、家人を連れて観劇した折のことである。舞台は長尾よねがGHQからの逮捕令を聞いた芦田伸介扮する公爵近衛文麿に青酸カリを手渡しシーンに差し掛かった。

「お殿様」

よねは自宅荻外荘に戻ろうとす

る近衛に、人目をはばかりながら声をかけ、歩み寄る。涙を抑えながら差し出したよねの手には服毒自殺のための青酸カリが握られていた。張りつめた冷たい空から12月の早い雪が舞い落ちていく。帝国劇場の中は時が止まったかのようになり誰ひとり微動だもせず、一心に舞台の上のよねを見つめる。

「モリツッ」

突然二階席から低い男の声がかかった。その声に勢いがついたかのように、森光子の演技はいよいよ光彩を放つ。ようやくにして青酸カリを近衛に手渡しと、よねは力尽き、よろめき、慟哭する。

「モリッ、につぼんいち」

再び感極まった男の声が沈黙を破った。わたくしたちはその声の主が、先刻席を外した白崎のものであることに気づき、恥ずかしさのあまり身を縮めた。森光子もまさか原作者が声をかけていたとは思ってもよらなかったであろう。

中公文庫版『当世畸人伝』のあとがき、「『当世畸人伝』と父白崎秀雄」より



「清澄庭園・明治の庭の成り立ち」

龍居 竹之介 たけのすけ

はじめに

私のお好きな涼亭では、嬉しい限りです。清澄庭園についてお話しできるのは、嬉しい限りです。

よくご覧下さい。この室内から眺める景色はまた格別だと思われませんが、都内の公開庭園で建物も備わった所には小石川後楽園や浜離宮恩賜庭園などがありますが、建物と庭の両者がよくなじみ合っているのは、この清澄庭園が一番です。

涼亭で接遇した最初のお客はイギリスの軍人キッチナーでした。外国軍人とはいささか不思議な感じですが、これは明治という新時代だったからであり、史跡としての価値の一端を、清澄庭園が荷っていることも示しています。

今日はその清澄庭園を通じて明治の庭の成り立ちを紹介しましょう。

近代東京の庭園

現在の日本の庭園史の中でなおざりにされているのが近代、特に江戸から明治にかけて、そして現代に至るまでの時代です。庭園史の本でも、古代から割に詳

しいのですが、明治、大正、昭和はくくりだつたりします。「平安時代の庭」、「鎌倉時代の庭」、「室町時代の庭」など他は1章ずつに編んでいますが、明治以降はまとめて1章です。でもそれはちがうのではないのでしょうか。

私が生まれ、育ってきた昭和という時代の昭和の庭は単独では1章にまとめる価値はないのでしょうか。そんなことはないでしょう。何故そう思うかというと、私は幼いときからずっと昭和の庭の中で育ってきたので、この時代の庭が戦前、戦中、戦後の複雑な顔を持つもので、決して単純ではないと知っているからです。

明治の庭や大正の庭と、個別に研究なさっておられる方はいででしょうが、明治、大正、昭和、平成に渡った「近代、現代の庭」に体系づけて論じられる方は少ないかのように思われてなりません。しかし今を生きる私達は、今に至る「近代、現代の庭」は一体どういうものかを位置づけてもいいのではないのでしょうか。

春や秋には京都へ行きましようと思人はいいます。京都の庭に触れ「すばらしい。日本の庭の誇りですね」と大感激されますが、それでおしまい。しかし庭は日本中にあります。それもきつと子供のころから親しん

だものだつてあるに違いありません。でもある程度の年齢になると、庭なら京都という価値観に変わり、地元のは関心も寄せてもらえませんが、でもそれはありません。人はその土地ならではの庭で育ってきました。また住いが変わったら、新しい生活環境の中で接する庭と友達になつていきます。そういうものではないでしょうか。それぞれの土地にはそれなりに、親しみ深かったり、思い出を秘めた庭も、きつと多くあるはずなのです。

清澄庭園の評価

さて清澄庭園の評価はあるようではないような不思議な庭です。しかし何人かの方は明治を代表する庭といわれています。中でも小寺駿吉(註1)は明治神宮と並べて絶賛しています。明治神宮については、日本庭園協会生みの親の一人で、神宮造営にも参加した上原敬二も、その重要性を力説しました。理由は「かつての当地の景観を何代もかけて再現を図る壮大な庭」という点で、これについては小寺も全く同意見です。

清澄庭園については、江戸時代の大名庭園の流れを汲みながらも実はそれらとはまったくつくりも内容も異なったものとしてとらえ、しかもそれを新時代の庭として成立させた



涼亭から大池越しに大正記念館を望む 2022.12.15 酒井和佳子氏撮影



点を高く買っていたのでした。

したがって小寺は、江戸時代の庭を店じまいして新しい発想で新しい明治という時代のさがけとして生み出された清澄庭園を讀えたのでした。

## 江戸の庭の歩みと顔

そこでまず江戸の庭自体を振り返ってみます。〈新しい明治の庭・清澄庭園〉との違いを比べるために。

江戸はその区域の70%が武士の居住する武家地で、その中には大、中、小の藩主が住む大名屋敷があり、そこには大庭園がありました。したがって、江戸は大名庭園のメッカだという評価です。

一方で、江戸の庭園も大したことがないという評価もあります。なぜかというと、江戸という土地は庭をつくりにくい地形だからです。山手の方では水が使えない。低地もなかなか大変で海や川から水を引くしかないのです。そこで、いわゆる潮入りの庭が生まれました。その代表的なものが浜離宮恩賜庭園で、潮入りの池を中心とした目先の変わった景觀をつくりました。

一方、小石川後樂園をみると、沼と台地があつて庭をつくりにくい地形です。そこで、沼地に池を、台地と斜面地に庭をつくり、下から見上

げるようにして、見どころをつくりました。

現在、東京都が管理する古庭園の中で台地上の元大名庭園は、小石川後樂園と六義園の2カ所だけです。

小石川後樂園は神田上水を、六義園は千川上水をわざわざ庭のために引いています。小石川後樂園は御三家の水戸家の、六義園は五代將軍徳川綱吉に寵愛された柳沢吉保の庭だから上水を引き入れられたのです。それ以外のところはどこも上水を使わしてもらえません。だから庭のために水を引っ張ってくるのは大変なことなのです。

それでいて、何かというと、京都の庭と比較されます。京都というところは、山に囲まれた盆地で、そういうところに一つの世界をつくっています。さらに庭に使う材料が手に入りやすい。まず石は尼崎博正の調査研究(註2)でわかる通り、京都の周辺から入ってきています。

東京で庭をつくるとき京都の庭にあるような名石が欲しいと思つても、そういう名石を庭に入れるには大変破格の費用がかかります。何万坪もあるような大きな庭園では特に数が必要ですから、実際には入れられない。樹木もそうです。京都の庭で見慣れた樹木を入れたいと思つても、

武蔵野の空<sup>から</sup>風に合うようなものでなければすぐ枯れてしまいます。つまり、石も木も使いたくても京都と同じものは使えないのです。あるのは広い敷地だけ、広い面積を活かすしかないという悪循環です。

現在は戸山公園になっていますが、江戸時代には尾張徳川家の下屋敷であつた戸山荘では、13万坪の広大な敷地に大きな池をつくりました。それでも13万坪は埋まりません。そこで小田原の宿場町をそのままつくるような仕掛けをしたわけです。戸山荘の名物と言つたら、小田原宿の街並みのそっくりさんなのです。

京都は、天皇のおひざ元という格式と伝統があり1000年にわたる歴史の中で一つの世界ができています。江戸は300年です。歴史の長さも違いますが、地理的条件が全く違います。それから社会的な流れでも、庭のありようが違うのは当然です。

江戸の土地利用では、武家地の比率は70%、寺社地が15%、残りの15%が町人地でした。そこに最初は50万人、のちには100万人が住む都市になりました。ところが70%の面積を占める武家地に住んでいる実際の人数というのは



隅田川と堀に囲まれた深川親睦園の周辺 東京都市図(明治42年)

わからないのです。つまり、参勤交代によって、国元と江戸と2つの基地を1年おきに往復しますので、江戸屋敷にずっといる家来、そして参勤交代のときだけついてくる家来がいます。つまり江戸というのは、その時々によって住んでいる人数が違ふという大雑把な町なのです。

庭については資材もアイデアもとにかく少ないのに、面積だけが広くなります。だからどうしたつて京都には負けるのです。

そこへもつてきて、明治維新で大名のお屋敷が全部国に召し上げられてしまいました。広い土地には公共の建物が建ちますが、大名によって



は元の屋敷の一部を使わせてもらって屋敷街という形に姿を変えていきました。大体が分割されて町屋になっていくというケースが多く、新しい市民たちの住宅になっていきました。これが幕末から明治にかけての武家地の状況です。

### 清澄庭園の成立ち

清澄庭園の土地は江戸時代の大名下総国関宿藩主久世大和守の下屋敷でした。明治の初年には当然の如く国に召し上げられました。

その土地を買ったのが岩崎彌太郎です。彌太郎は土佐藩の下級武士で、藩の商売方を任され、成功して「郵便汽船三菱会社」をつくり、やがて日本の船の交通つまり海上権を掌握しました。1877（明治10）年に起きた西南戦争で東京から九州まで兵を運ぶという軍需輸送を一切引き受け大変な財を成しました。その勢いをもって1878（明治11）年にこの土地を買いとったのです。

その後、3年かけて大名庭園の地割を活用して庭をつくりました。池は江戸湾から隅田川、隅田川から仙台堀まで入ってくる水を水源として潮入りの池を完成させました。

次に石が必要になります。江戸時代は入手できたのはせいぜい伊豆石

ぐらいで、品川辺りや隅田川辺で陸揚げされたとしても、船便での運搬代は大変なものでしたので、そうそう石の形や石質に選り好みはできませんでした。とにかく使う数量だけは何とか入れたいという状況でした。

ところが、岩崎家は財力がありますから広くから石を集められました。軍需輸送する船を使って石を運ぶのはお手のもので、自由自在に名石を運んできました。現在の清澄庭園が「石の庭」とも言われる所以です。この石の輸送力こそが大名庭園をしのぐ大きな力なのです。小石川後楽園などの大名庭園と比べたらこの石の凄さがわかります。

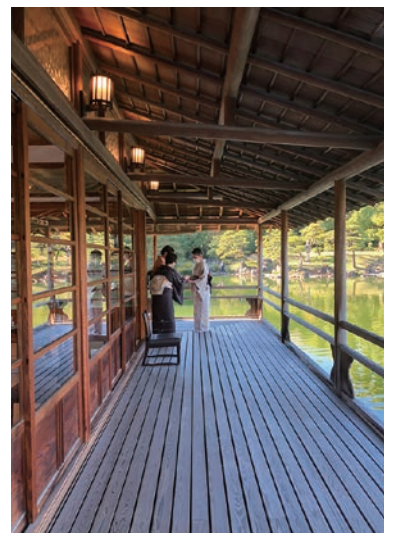
でも彌太郎はここに住みませんでした。「深川親睦園」と名付けて、社員の休息、あるいは親睦の場所として、加えてお客さんたちをもてなす場として活かしたのであります。ちなみに「親睦」とは明治時代の大流行語でもありました。

形は江戸の大名庭園風ですが、社員などのための建物であり、庭であり、親睦を深める親睦園だということです。ですから性格的にも内容的にも大名庭園とは全然違うのです。現在も一見大名庭園みたいな顔をしています。目的や使用材料など全ての面で「明治の庭」なのです。

「明治の庭」であることを強調しているのが、1885（明治18）年に50歳で亡くなった彌太郎のあとを継いだ弟の彌之助の力です。彌之助はこの庭を最終的にしっかりとした形でまとめました。東側の池の前には日本館を、西側の池の前には西洋館を建てました。西洋館はジョサイア・コンドルにつくらせています。日本館、西洋館共に日本風の池に沿わせています。

明治になり敷地が狭くなった元大名屋敷には和館の他に洋館もつくられました。和館で日常生活を送り、洋館で接待するという屋敷の構成です。接待についてはこの清澄庭園でも同様ですが、もっと広い意味での親睦という役目を持っていました。次に3代目となる彌太郎の長男久彌が貢献したのが涼亭です。涼亭（註3）についてはリーフレットを読んでみましょう。

池に突き出るようにして建てられた数寄屋造りの建物。これがこの庭園を日本情緒豊かなものにしていきます。涼亭は1909（明治42）年に国賓として迎えた英国のキッチナー元帥を迎えるために岩崎家が建てたものです。震災と戦火の被害からまぬが



涼亭内部は外国人サイズ・鴨居の内法寸法は6尺5寸（約197cm）

れて今日に至りましたが、1985（昭和60）年に全面改築工事を行いました。集会場として利用できません。2005（平成17）年には「東京都選定歴史的建造物」に選定されました。

このように英国元帥キッチナーが来るということで、接待のためにつくりました。キッチナーは西洋館で好きな美術品を鑑賞し、その後庭に出て、景色の素晴らしさにびっくりしたということです。それから涼亭にやってくる、日本式の建物内に入るのですが、全く違和感はありません。久彌がキッチナーを接待するということを念頭に置いて、外国人のサイズ（註4）でつくっているからです。つまり、今は畳になっていますが、当時は靴を脱がずに入れるように絨毯敷きにしていました。そしてテーブルがあり椅子に座るのです。そして椅



子に座った目線で庭を眺めます。

久彌は叔父彌之助が社長であったときにイギリスへ留学しています。その経験を活かして接待したので、キッチナーは、まったく違和感なしにこの涼亭で楽しめたのです。決して日本へ来られたのだから和風の座敷へどうぞと接待するものではありません。久彌はこの庭が椅子に腰掛けて眺めても十分楽しめると思われ、確信を持っていたとも思われます。

それは設計を保岡勝也という海外留学の経験者で日本建築からその庭まで精通した気鋭の建築家に任せたことで分ります。つまり接待成功は久彌の周到な準備によったのです。

涼亭のような建物が建てられるというのは財力があつてのことです。

明治維新で武家政治は終りを告げ社会の不安が案じられましたから、新時代の予測は難しかったことでしょう。しかし休むことのできない経済は、新たに三菱岩崎家のような財閥を中心に動き出します。

当然、国の目標は世界での地位確立と経済成長におかれて進みます。

そんな中で国内外を問わぬ親睦のための清澄庭園の存在は稀有でした。

財閥の庭は江戸の大名庭園の形式は継承していますが内容的に違うもので、財力が庭の内容をランクアップ

プさせています。江戸の大名は貧乏でしたし、武家の庭では馬術用の馬場や弓術用の的場、鉄砲稽古場もつくらなければならずそういうスペースも必要でした。庭づくりにそうその財力を掛けるわけにはいかなかったのです。さらに資材も集まらなかった。それが明治になり、岩崎家に代表されるように、財力のある者たちが庭付きの大邸宅をつくるように変化してきたのです。

このように「明治の庭」は、江戸の庭の集大成であると同時に、内容的には違うものでもあるのです。

### おわりに

もう一つ、岩崎家の凄さをお話します。それは、3代目の久彌が清澄庭園と六義園<sup>註5</sup>の両方を東京市に寄付したということです。これらの庭は関東大震災と戦争中の空襲と2度罹災しています。どちらも震災や空襲に遭ったときに、まず公共性を重んじて市民のために開放しました。そういうこともあり、早くに久彌は、これからはこのような庭は個人で持つていてはいけない、広く、市民の皆さんのものにして、慰安の場所としてほしいと考えて寄付したのです。これが三菱岩崎家の庭に対する出処進退の素晴らしさだと思います。

もう一つ付け加えるなら、ここ清澄庭園であれば、清澄通り側の一画を、六義園であれば、本郷通り側の一画をそれぞれの庭園に付けて東京市に寄付しています。どちらの一画も店舗などに貸していて、その借地代金は、本来三菱岩崎家に入るべき収入でしたが、その収入源も庭園本体と一緒に寄付したのです。

久彌は「庭は維持にも費用がかさむから」と収入のあがる土地まで付けて寄付してくれたのでした。つまり管理費の一部になればとの温情ある計らいだったのです。最もこの温情も終戦後、都は簡単に他へ転用し往時を知る者を悲しませましたが。

繰り返しますが、三菱岩崎家は大名庭園の遺構を活かしながら、実は全く違う庭として清澄庭園をつくり上げました。そして時世に応じた形で庭と共に歩み、そして最後は、熨斗を付けて公共のものとしてくれたのです。

これぐらい内容に富んだ庭はないでしょう。これだけ幅があつて、内容があつて、しかも皆さんのために使ってくださいという庭は他にありません。そのことを考えると、三菱岩崎家は凄いなと思います。庭の面から考えたら、私は涙が出てきます。この庭が関東大震災と戦災で救った

人々の数を考えたら、何とも言えません。こんな力のある庭はありません。

このように見てくると清澄庭園は名勝だけではなく、史跡としてもその価値は高いと考えられ、文化財として認められないということは私には理解できないのです。

ぜひぜひ国はこのすぐれた清澄庭園を文化財に指定していただきたいと、私は願っている次第です。そのためにぜひとも皆さんのお力をお貸しいただきたいと存じます。何卒よろしく。  
(名譽会長)

(文中、敬称略とさせていただきます)

註1.. 小寺駿吉は1901(明治34)年、北海道小樽市生まれ。日本の造園家・農学者。造園学分野で東京大学、千葉大学等で教鞭をとり、学究の途を一貫して歩む。

註2.. 尼崎博正『庭石と水の由来―日本庭園の石質と水系』昭和堂、2002

註3.. 設計は保岡勝也。保岡は1877(明治10)年、東京生まれ。1900(明治33)年、東京帝国大学工科大学建築学科(現・東京大学工学部建築学科)を卒業。工科大学では学長であった辰野金吾に師事した。卒業後、岩崎久彌が社長を務める三菱合資会社(現・三菱地所)に入社し、丸の内赤煉瓦街をはじめ三菱関連の様々な建物の設計に携わる。

註4.. 保岡勝也編『新築竣工家屋類纂第1輯』進友社、1912によれば、「内法寸法を6尺5寸とせしは外實をして鴨居の低きを憂慮せしめざらんが為」とある。

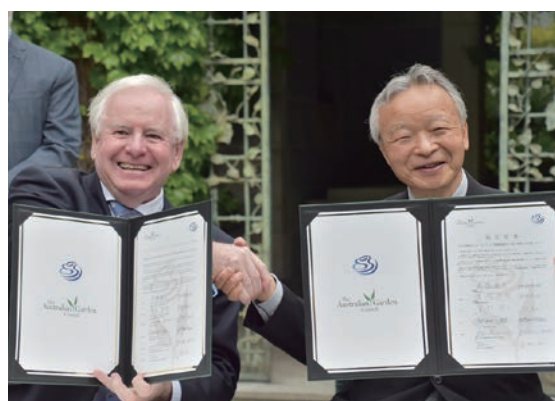
註5.. 岩崎彌太郎が1878(明治11)年に買収し、久彌が1938(昭和13)年東京市に寄付するまで岩崎家の別邸として利用していた。買収も寄付も清澄庭園と同時期。



## オーストラリア庭園協議会 (The Australian Garden Council) の「協定覚書」 の調印

2023 (令和5) 年4月25日  
オーストラリア大使館  
曾根 将郎

2023 (令和5) 年4月25日(火)  
オーストラリア大使館に於いてジャスティン・ヘイハースト駐日オーストラリア大使立会いの下、日本庭園協会とオーストラリア庭園協議会との協定覚書の調印式が行われました。オーストラリアからはオーストラリア



喜びの表情を湛える両組織の会長  
(左: グラハム・ロス氏、右: 高橋康夫氏)

庭園協議会会長のグラハム・ロス氏はじめ7名の方に参加していただき、当協会からは高橋康夫、内田均、加藤精一、曾根将郎、細野達哉、大平敦子と木村俊三(敬称略)の7名が参加しました。木村氏には本協定の仲介にご尽力いただきました。「協定覚書」の文言(原文のまま)を次に記します。

この覚書きの目的は、これら二団体と日豪両国の未来の友好と関わりを促進することです。

この覚書きのもっとも重要な点は、



オーストラリア大使館の庭にて行われた調印式の様子



協定覚書

両国に昔から受け継がれた、さまざまな形式の庭園芸術にふれる機会を通して、日本とオーストラリアがお互いに交流を行い、関係を深めることです。

友好関係を広げ、お互いの庭園技術を伝えあうことは、両者の相互理解を深め、両国の造園と園芸のコミュニティに長期にわたり利益をもたらすものです。

将来的には、両国の有能な若手造園家と園芸家の定期的な交流(インターンシップ研修)を行うことにより、さらに両協会の友好関係を深めることを望みます。両国の研修生は、さまざまな優れた日本とオーストラリアの庭園施設を経験し、学ぶ機会が得られることでしょう。

高橋康夫会長は当協会の指針を説明した上で次のような挨拶を述べました。

### 〈当協会の指針〉

●日本庭園文化を守り伝える技術を保持及び継承(後継者育成を主に)する。

●日本庭園の持つ歴史性、文化性、芸術性を普及啓発(広報・海外交流・鑑賞会など)する。

両国の歴史や文化及び庭園文化を相互理解するとともにオーストラリアの庭園の歴史や技術を学ぶことで、庭園と園芸のコミュニティの躍進に多大な影響をもたらすと考えており、いずれ若手造園家の交流・育成にも協力し合う方向で発展を目指し



グラハム・ロス オーストラリア庭園協議会会長



ジャスティン・ヘイハースト駐日オーストラリア大使



たいと考えている。

現在当委員会は、来年度に向けて若手造園家育成のため定期的なインターンシップの交流ができるよう準備しています。会員の皆様に於かれましては、海外留学生の積極的な受け入れ、また、海外での文化交流に向けての研修生の希望をそれぞれ募っていきたいと考えています。興味関心のある方は当協会事務局にお問い合わせの上、ご協力いただけますようよろしくお願いいたします。

## ポートランド日本庭園60周年記念式典

2023（令和5）年5月26日 八芳園

細野達哉

2023（令和5）年5月26日に、東京都内の八芳園にてポートランド



屋外でのウェルカムレセプション

日本庭園の60周年記念式典が行われた。当協会からは、高橋康夫、内田均、廣瀬慶寛、小沼康子、曾根将郎、山田拓広、星宏海、細野達哉（敬称略）が出席した。

式典では高円宮妃久子殿下が祝辞を述べられた他、岸田文雄内閣総理大臣からの祝辞（代読）、ならびに柳井正氏、隈研吾氏らのスピーチが行われ、半世紀を超えるポートランド日本庭園の歴史とその節目を祝った。

CEOのステイブ・ブルーム氏からは、ポートランド日本庭園の歩みと展望、そして庭園を支えるために新たに設立されたジャパン・インスティテュートの取り組みについてのプレゼンテーションが行われた。

ポートランド日本庭園のより一層の発展が期待される、盛大な記念式典であった。



記念式典にて祝辞を述べられる高円宮妃久子殿下

## シカゴ市「大阪ガーデン」における姉妹都市締結記念事業への協力

細野達哉

国際活動委員会では、大阪市からの依頼を受けてアメリカ合衆国イリノイ州シカゴ市ジャクソンパーク内にある日本庭園「大阪ガーデン」を対象にした、大阪市とシカゴ市の姉妹都市締結50周年記念事業の計画に協力している。

当該庭園では、2019（令和元）年に国土交通省による海外日本庭園再生プロジェクトの一環で協会チームが派遣され、石組工事と剪定指導を実施している。今回の事業はその実績を踏まえて、両市の記念事業としての庭園改修および技術者交流等を実施する方針で計画が進められている。

現段階では大阪市主導のもと、庭園の管理組織であるChicago Park District、従来から当該庭園の改修やコンサルティングに携わっている内山貞文氏（当協会評議員、国際活動委員・ポートランド日本庭園チーフキユレーター・北米日本庭園協会理事）らとオンライン会議による協議を重ね、具体的な事業内容の検討を行っている。事業の実施は2024（令和6）年夏季頃を見込んでいる。

## ポートランド日本庭園「技と心セミナー」講師派遣

曾根将郎

ポートランド日本庭園からの「技と心セミナー」の講師派遣依頼を受け、本年度は星宏海氏（国際活動委員会副委員長）を派遣する。日程は2023（令和5）年7月11日（火）から14日（金）の4日間で、作庭実技の指導講師ほかを担当する。

（曾根将郎・国際活動委員会委員長）  
（細野達哉・国際活動委員会事務局長）

（写真は全て細野達哉氏撮影）



シカゴ市大阪ガーデンの太鼓橋 2022.8.2



全国支部長連絡協議会・本部共催  
「京都庭園視察研修会」

2023（令和5）年5月13・14日

近畿支部長 山田 拓広やまだ たくひろ



5月13日から14日にかけて、京都にて日本庭園協会全国支部長連絡協議会見学会が、庭園協会本部との共催で24名の参加者を得て開催された。

全国支部長連絡協議会は各々の活動等を情報交換するため、各支部持ち回りで年1回開催され、併せて見学会も行われてきた。今年の会議はコロナの状況も鑑みオンラインで1月28日に開催されたが、5月頃に制限が緩和されるとの情報から、見学会のリアルでの開催が予定された。

庭園協会は一般社団法人格を取得しており厳密な報告等が求められるため、現在各支部組織は任意団体扱いとなっている。そのため今回の見学会は連絡協議会と庭園協会本部の共催という形となった。

まず5月13日は、円山公園と高台寺十牛庵庭園の2ヶ所を見学した。

円山公園

円山公園の位置する東山麓から八坂神社に至る丘陵地一帯は、鎌倉

以前より真葛やススキが生い茂る「真葛ヶ原」と呼ばれ、江戸時代には眺望の素晴らしい遊興景勝地として知られていた。知恩院、安養寺に隣接し、安養寺の山号「慈円山」から「円山」と呼ばれるようになったと伝わる。1871（明治4）年の太政官布告により一帯は官有地となったが、その後1886（明治19）年に当時の内務大臣 山縣有朋から許可を受け、公園として開設されている。明治初期には一帯に旅館やホテルが開業し、開催された博覧会の来客が利用している。1873（明治6）年以降には祇園枝垂桜周辺が京都勧業のため整備され、桜の名所として今日に至っている。

1910（明治43）年には京都高等工芸学校の武田五一教授らにより改良計画がまとめられ、七代目小川治兵衛の植治により施工された。庭園内の水は琵琶湖疎水から引かれ、滝石から流れ護岸石組の景色、池から華頂山を望む広く開かれた景色など、四季折々に散策できる公共空間としての造園の試みが読み取れる。

案内は公益財団法人京都市緑化協会の佐藤正吾事務局長、大塚直子様により行われた。祇園枝垂桜下から市街を望める安養寺下の四阿まで、また絶滅危惧種であるキクタニギク

自生地 の菊溪川周辺など、広い公園内の普段ならあまり行かないであろう場所まで案内いただいた。本年4月から円山公園は指定管理者制度が導入され、緑化協会が業務を請け負い、京都府造園協同組合が委託管理作業を行うようになっていく。桜はもとより、公園内全体の管理を計画的に行い、地割や石組、植生など公園の本質的価値による良好な景観が維持できるとの検討が進められている。

続いて高台寺南側まで石畳のねねの道を散策しながら移動した。

高台寺 十牛庵じゅうぎゅうあん

高台寺十牛庵は、以前は料亭高台寺土井として知られていたが、現在は株式会社ひらまつにより運営され、上坂浅次郎と北村捨次郎による数寄屋建築から植治による庭園をながめつつ、食事ができる設えになっている。御来客の無くなる午後遅くの時間にゆつくりと見学をするご配慮を、山田総支配人からいただいた。

もともとは1907（明治40）年頃に、正法寺塔頭の地を清水吉次郎



高台寺十牛庵 屋内から下段の庭をみる 筆者撮影

が買い取り作られている。庭園は植治によるもので、地形に沿って上段、中段、下段に分かれている。上段の庭からは京都市街が一望できたようである。建物座敷から見える下段には小溪、滝、流れが石組で表現されており、降雨時には上段部分でまとまった雨水が伝い落ちていたと考えられる。今で言うレインガーデンの一つだろうか。更に1913（大正2）年には大規模な改修が行われ、庭園はほぼ現在の形になったと考えられている。

2017（平成29）年には、下段の庭南側に中村外二工務店により茶室が再建された。この時に周辺露地



とともに、庭園全体の整備も行われた。考え方の基本は、やはり庭園の本質的価値であり、地割りを読み込み庭の骨格を理解することで、借景でもある斜面の石組を表に出す作業が行われている。

### 建仁寺塔頭の庭園

2日目は建仁寺の塔頭庭園を見学した。

建仁寺は京都市東山区にある臨済宗建仁寺派の大本山の寺院である。

1202（建仁2）年、鎌倉幕府2代将軍源頼家の援助を得て、榮西によって開山された。榮西は中国・宋



霊源院 甘茶の庭「鶴鳴九皐」 作庭者のおすすめアングル 清水哲也氏撮影

で禅仏教を学び、日本に戻り禅宗の布教につとめた。そのときに持ち帰ったお茶を広めたことで「茶祖」と呼ばれるようになった。茶の湯以前の禅院における喫茶儀礼としての「四頭茶会」が現在に伝わっている。今回の研修会では、中根庭園研究所の中根行宏、直紀両氏の案内で3ヶ所の塔頭庭園を見学した。

霊源院の甘茶の庭「鶴鳴九皐」は、

2020（令和2）年に中根行宏氏

と直紀氏によって作庭された。案内

では作庭にまつわる興味深い話を聞

くことができた。引き続き、両足院

と霊洞院の庭園を訪れた。

見学当日は雨天だったが、雨に洗われた石組、そして新緑の美しさが印象に残る見学会となった。

今回は全国支部長連絡

協議会と本部の共催で多

くの方に声をお掛けし、

参加いただくことができた。

これから支部毎の見学会開催により、各々

の地域で特色ある庭園の

地域性を学ぶことができ

ればと考える。ご参加、

ご参画いただいた皆様に

感謝申し上げます。

### 京都見学会に参加して

斎藤 小百合



筑波大学で建築を学び、建築のみならず帽子や衣裳のデザインを手掛ける。2年間のモロッコ生活で日本文化の素晴らしさに目覚め、京都造形芸術大学通信大学院で日本庭園を学び、建築と庭と文化をつなぐ活動を始める。文化財建築や庭での演奏会、吟行会、謡の会など主催。抹茶と和菓子好きの一級建築士。

時折激しい雨に見舞われた見学会でしたが、素敵な庭を前にして、雨は若葉や苔を艶やかに、石組もイキイキとさせ、十牛庵庭園では、まるで舞台の背景のように庭が広がっていました。庭を借景として舞台としても利用される部屋は、まさに建築と庭をつなぐ装置であり、豪雨で洗われた緑が美しかったです。

2日目は、建仁寺の塔頭の庭三ヶ所を見学、霊源院では、まず甘茶をいただき、新しく作庭するにあたって若手に作庭の機会をという御住職の想いや、作庭した中根行宏さんの石を素早く据えた作庭時の話。据えられた主石が和装の夫婦のように見えたのは私だけでしょうか。両足院では東側斜面をササからサツキツツジに改修した経緯など、霊洞院では建仁寺管長小堀泰巖殿下より茶の伝

来や禅のお話と共に、お菓子、お抹茶、水菓子、ほうじ茶と、次々と順番に振舞われ、これは禅寺フルコースのおもてなしとのこと。普段より文化財庭園の保存修理と活用や、新しい作庭も行う山田さんや中根さんの解説は楽しく興味深く、またそれをみなさんと共有できることはとても幸せなことでした。

懇親会は、老舗料亭「鶴清」。なんと舞妓さん芸妓さんの演舞あり、そして、大先輩より「あなたの研究しているものは石燈籠ではない」と言われ、石燈籠についての一考も得ました。確かに、燈籠は元々仏像を照らす光を灯す道具であるから、ことに明治以後は、明かりを灯す機能よりも、存在感を誇示するモニュメントとしての役割が主となっていることを考えると、燈籠ではないと言われるのも納得です。

円山公園の指定管理者の方に、碑文のある石燈籠（の形をしたモニュメント）のことがあまり知られていないことをお聞きして、今後の課題として、もっと研究のアウトプットに力を入れていきたいと思いました。山田近畿支部長はじめ役員の方々盛りだくさんのおもてなしで、京都ならではの素敵な見学会に参加できました。感謝申し上げます。（正会員）

## 新役員紹介

### 新副会長

ひろせ よしひろ  
廣瀬 慶寛



1951年生まれ  
新潟県出身

この度、副会長の  
大役を仰せつかりました。

今までは技術委員長を13年勤め、伝統庭園技塾では東日本大震災復興記念庭園で塾長を務めさせていただき、そして庭園技術基礎講座を13回企画いたしました。これも会員皆様方のご協力の賜物であります。本当にありがとうございます。これからも皆様方の声に耳を傾け、各委員会を盛り上げ庭園協会に尽くし、次世代に繋いでいきたいと思います。

### 新常務理事・技術委員会委員長

しみず てつや  
清水 哲也



1970年生まれ  
神奈川県小田原市出身  
44歳から5年間、

神奈川県支部長を務めました。この在任期間で大きな刺激を受け、私にとって貴重な経験となりました。この経験を活かし、各支部の活性化と交流に尽力していく所存です。

### 新理事

いしかわ はるいち  
石川 治彦



1964年生まれ  
新潟県新潟市出身

思い返すとこれまでの人生の中において私自身日本庭園協会の皆様に、本当にお世話になりました。

伝統庭園技塾、貞観園の修復工事、田中泰阿弥研究会などの事業や活動、そして、多くの素晴らしい友人や先輩との出会いなどを通じてたくさんの学びと発見があり、私の生業の基礎を日本庭園協会のおかげで作りに上げる事が出来ました、感謝申し上げます。

今後役員として日本庭園協会のお力になれるよう、微力ながら努めてまいりますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

### 新評議員

ひろせ たけおみ  
廣瀬 辰臣



1952年生まれ  
千葉県香取市出身  
働くことだけが私の

の生きがい。月の3分の1は現場作業、あとは薪事業を行っている。直

径20〜60センチの原木を長さ30〜40センチにチェーンソーにて玉切り、34トン圧の薪割り機で割る。現場には6人の後期高齢者。辛いとは誰も言わない。私も含めておそらく楽しいのだろう。庭に対する思いも同じである。皆、目が生き生きしている。これが職人なんだなあ。でも、薪はなかなか売れません。それがいいんです。

日本庭園協会の益々の発展に、微力ではあるが御協力させていただき

### 鑑賞研究委員会委員長

うちだ ひとし  
内田 均



1958年生まれ  
神奈川県横浜市出身  
1983（昭和58）

年の「伝統庭園技塾」国営武蔵丘陵森林公園⑤に参加し、会員となりました。当協会の定款第2章（目的と事業）の第4条（1）に「庭園、公園、風致等の鑑賞」が第一に挙げられています。その大任を、菊地正樹前鑑賞研究委員会長の後任として、高橋康夫会長より指名されました。多くの会員にご参加いただける企画を立てますので、ご支援をよろしくお願いいたします。

### 新名誉会員

きくち まさき  
菊地 正樹氏

1979（昭和54）年に入会以来、当時の東北支部や後の宮城県支部において相談役、支部長として地元会員をまとめ、さらに全国支部連絡協議会を立ち上げ、全国支部活動へのリーダーシップを発揮されました。特に、当協会設立100周年記念事業の「東日本大震災復興記念庭園」に関しては、企画、築堤、その後の維持管理まで仕切っていただいております。

本部においては1986（昭和61）年の評議員の任に就かれて以後、理事、常務理事を務め、さらに2016（平成28）年から副会長、2022（令和4）年から鑑賞研究委員会委員長に就任されました。長年にわたり当協会の運営と発展のためにご尽力いただき心より感謝申し上げます。（文・内田 均）





## 支部たより

### 第40回全国都市緑化フェア

未来の杜せんだい2023

〜Feel green!〜

2023（令和5）年4月26日（水）

6月18日（日）

菊地 新太郎  
たけだしんたろう  
竹田 利光  
たけだじみ光

仙台市で34年振りとなる都市緑化フェアが開催されました。会場や開催状況、そして出展庭園について報告します。

メイン会場、まちなかエリア会場、東部エリア会場や連携会場が設定され、市全域でフェアを盛り上げました。

メイン会場の一つの青葉山公園追廻会場は街の中心部に近く、広瀬川の川音が聞こえる河川敷で、振り返れば青葉城が見えるという大変景色の良い場所でした。この場所は、かつて終戦後の復興住宅が多く立ち並び古い住宅街でしたが、再開発により古い住宅は取り壊され新しく公園として生まれ変わりました。

会場内にはたくさんのお花がそこかしこに植えられ、華やかで明るく来場された方々を出迎えていました。

広大な会場は七夕をモチーフにした大花壇や販売ブースなどさまざま



実際の庭のような見本展示 菊地新太郎氏撮影

なゾーンがあります。

今年は春先から気温の高い日が多く、会場へ植栽されたチューリップやその他の花が開催前に散ってしまったりトラブルもありましたが、天気の良い休日にはそんな事などものともせずにとくさんの来場者が訪れ、にぎわっていました。

### 販売ブース「見本のような展示庭園」

菊地 新太郎

弊社植新緑化株式会社は販売ブースに出店しました。単に物を陳列するのではなく、展示物や植物を実際の庭に配置し、お客様がよりリアルなお庭の中で活用できるような見本のような展示庭園にしました。

実際に陳列してある草花より、見

本展示内の草花をご購入されるお客様が多いのに驚いております。

お話を伺ってみると「花を購入したいいいが、実際にどのような配置に植えれば良いかわからない。このように展示してあれば自分の庭に植える際にイメージしやすい」との声を多くいただきました。

見本展示のコンセプトは地中海沿岸の街並みの雰囲気、日本の落葉樹を組み合わせたテイストとしました。

弊社オリジナルのガーデンコテージが地中海的な雰囲気を一気に引き出し、来場された方々から「中を覗いて良いですか」の声をたくさんいただき、いくつか購入を検討したいとの声もあり、苦勞して設置した甲斐があったと感じております。

来場者は、年配の方々が多く、なおかつ会場は駐車場が用意されていないため、子育て世代のファミリーは来場しにくいのが現状です。30代の私と同じ世代にこのようなイベントや庭への関心を持ってもらえるよう、より精進していかなくてはと感じました。

（宮城県支部副支部長）



テーマ「ゾウさんのすべり台」 竹田利光氏撮影  
子供に人気の「ゾウさんのすべり台」 「銅賞」受賞

### 出展庭園「ゾウさんのすべり台」

竹田 利光

広大な敷地の中のモデルガーデンブースに企業出展しました。参加企業や団体は県内外から49社あり、賞レースということもあり、熱い思いのこもった多くの作品を見ることができました。

僕がつくったのは「ゾウさんのすべり台」です。今の僕を出し切った庭が出来ました。

ゾウさんの高さは2・4mあり、支えとなる両耳は、顔はパネルで左右高さを変えて、子供用と大人用としました。着地マットの下には、押すと音が出るゴムのおもちゃが仕込んであり、すべり降りた瞬間、鳴き出すというユーモアの仕掛けをつくりました。スピードや着地位置に

よって鳴き声が変わるので多くの大爆笑をいただきました。

すべり台の使用にあたっては、仙台市との協議により事故防止のために補助員をつけることが条件となりましたので、常時開放とはいかず、休日のみ僕が補助員となって開放しました。休日はチビッ子の大行列、庭の前は見守る親たちやギャラリイでいっぱいでした。

実は、この庭は10代半ばから20代前半のギャルに向けて作りました。一番欲しかった言葉「カワイイ、ちよーうける、ばえる」をかなりいただき、会場を一番盛り上げた庭となりました。

僕は「新しい庭ってなんだろう?」と、考え続けて、「ユーモアのある庭」にたどりつきました。これこそが新しい庭のジャンルだと確信しています。これから自分を信じて突き進んでいきます。

(前宮城県支部長)



ユーモアの仕掛け。押すと音が出ます

## 本部たより

### ●第31回佐藤国際交流賞受賞

2023(令和5)年度の佐藤国際交流賞を当協会評議員の内山貞文氏が受賞されました。

内山貞文氏



評議員

ポートランド日本庭園  
チーフ・キュレーター

受賞理由…(一社)日本公園緑地協会発表より・一部抜粋)

平成20年からはポートランド日本庭園の技術主監として、庭園の維持管理から現地スタッフの教育、地元住民への日本庭園・文化の啓蒙活動などを実施。ポートランド日本庭園内で令和3年に開始した、日本文化を総合的に学ぶための新事業「ジャパン・インスティテュート(The Japan Institute)」の設立に尽力し、講師を務める。(中略)現在も大学やアメリカ全土で文化交流や現地専門家の育成のための講義を実施する等、幅広く日本庭園及び日本文化の発信に貢献している。(後略)

### 鑑賞研究委員会

9月16(土)・17(日)、宮城県において庭園鑑賞会を開催します。1日目は、竹亭大和別邸(庭正庭芸研究所作庭)と100周年記念事業で

築庭された「東日本大震災復興記念庭園」視察し、2日目は「庭正パーク(お庭の体験型展示場)」を見学します。奮ってご参加ください。

### 技術委員会

9月2(土)・4日(月)の3日間、静岡県掛川市の松ヶ岡(旧山崎家住宅)を会場に「伝統庭園技塾」を開催します。古庭園の修復に関心のある会員の参加をお待ちしています。

### 国際活動委員会

国際活動委員会の活動にご協力いただける方を募集しています。

### 新刊紹介

#### 『植栽技術論』内田均著

著者は、当協会副会長の内田均氏。本書は、東京農業大学教授として長年にわたり造園の現場を重視した研究、教育活動およびこれまでの調査・研究成果をまとめた一冊です。内容は、植栽における移植や育成の技術、管理実態、樹木の生産・流通、さらに道具や造園樹木など多岐にわたっています。また、当協会



『植栽技術論』  
建築資料研究社、2023.4  
3,200円+税

の『庭園協会ニュース』他の造園関連メディアに寄稿されたエッセイも多数収められ、内田氏のお人柄もうかがえる魅力満載の書。会員必読の書としてお薦めします。

### 会費納入のお願い

当協会は、会員の皆様の会費によって運営しております。今年度の会費の納入がまだお済みでない方は、速やかな納入をお願いいたします。

### 新入会員・氏名(住所)

(2023(令和5)年4月1日から6月30日入会)  
正会員／安井玲子(京都府)、笠井一里(石川県)、伊賀上達輝(愛媛県)  
維持会員／緑彩ガーデン(株)(埼玉県)  
玉泉 (入会順・敬称略)

### 編集後記

★宜雨荘庭園の写真は、扇湖山荘で廃棄寸前だったスライドやプリントを救い出し保管してきた加藤映氏の提供。庭園は失われたが、これらの写真と加藤氏の解説で広大な庭園の全容が見える。同時に若き岩城巨太郎氏の姿もここに。  
★佐藤国際交流賞は、佐藤昌氏(日本公園緑地協会会長、名誉会長)が造園分野における我が国の国際的地位の確立に貢献されたことを記念して、平成4年に設けられた。

編集担当…小沼康子／内田均／中山なつ希  
／酒井和佳子  
本文デザイン…由比まゆみ